

大学と科学の使命

—ヤスパースとポルトマン

研究員 嶋田 毅寛

スイスのバーゼル大学五百年記念に合わせた二人の識者による科学論及び大学論の評論に依拠した著作がドイツ・ピーペル社による編集を経て刊行されている。一方は哲学者カール・ヤスパース (Karl Jaspers, 1883-1969) による『真理と科学』であり、他方は生物学者アドルフ・ポルトマン (Adolf Portmann, 1897-1970) による『自然科学とヒューマニズム』である。

ヤスパースよると科学と大学両者の危機の根は同じところにある、それは同じ人間の精神 (Geist) から生み出された諸学科であるはずなのに、個々の専門家へと細分化されておき、それらの間でつながりがなく並存していることである。それは現代の我々の精神が分裂した姿を象徴している。このことから人は科学技術の使用のみに関心があられ、それらの構造や理論には関わらないため、自らが必要としているものを他者からあてにすると、科学迷信が起きている。また科学自体も存在理由を欠いているため、科学的技術の赴くところ遂には大量破壊兵器を生み出すこととなった。

ヤスパースにとって科学とは人間の悟性 (Verstand) が関わる分野であり、それは限界のあるものである。そし

て個々の領域のみに通用する強制的性質を兼ね備えているものと理解されねばならない。彼は人間としての交わり (Kommunikation) を行う理性 (Vernunft) を悟性と区別しており、科学的思考を持つ人間同士のおつき合いを経て交わりを起こさせる理性を神聖なものにすることが大学の使命であるという。

ポルトマンは生物学者として、今日の科学に対する危機を見抜いている。地球の歴史を測定する地質学が象徴するように、自らの観念の力がもはや体験の内容でもって充足することのできない年代を人間は保持している。このような体験と知の分離が適者生存を唱える進化論と相まって人間を生存競争の最終勝者にしてしまい、人間による自然破壊やある種の生物の絶滅の正当化を可能にした。また進化が全て生物学的なものへと還元されてしまい、人間の精神すらも生物学的な進化の結果となり、人間が培ってきた精神の歴史が軽視されている。

人間は他の動物と異なり、他の生物では胎児に当たる段階で出生し、人間における精神性が人間社会の中で習得されていくという生理的早産説はポルトマンの提唱である。その生理的早産説から導かれるのは人間の精神性の社会的遺伝であり、そこに彼は時代や空間を超えて人間を結びつけることを可能にするヒューマニズムを見出した。このような人間の未熟児状態における出生という事実は人間の可能性、開示性を示すものであり、ヒューマニズムもこのよ

うな人間の可能性に由来する。人間の世界関連が動物のそれよりも乏しいということは、裏を返せばそれだけ開かれているというのである。

ポルトマンによると大学は人間存在に安心と故郷を与えるような世界関連を基礎づけ、現世に対して憂慮することにも委ねられているという。科学的な世界観と人間の歴史において現れてきた精神的な世界観の二つを組み合わせることで、ポルトマンにとつての大学の使命である。これは生理的早産説から着想を得た、精神性の進化が人間の歴史の内に現れているという、社会的進化の説に基づいていると考えられる。

ヤスパースもポルトマンも、大学とは人間の精神性を説く場所であることでは意見が一致している。大学の由来も精神性の根本も異なる日本において、彼らの大学に対する危惧をそのまま受容するわけにはいかないものの、近年の世界のグローバル化に伴い、世界の至る所における人間の行為がどこで影響するか定かではないということも過言ではなく、特に核兵器や放射能に対する恐怖は我々日本人が強く感じている。精神性を失った科学は技術に引きずられるまま、現代の核の時代を引き起こしたのである。大学とは単なる教育機関に止まることのない、人間の精神性を次世代に伝達する知の総合、社会的遺伝の場である。